

「書評と紹介」

自治体史の新たな発展を目指す第一歩として

―「五所川原市史通史編2」を読んでの若干の感想―

末永 洋一

一

五所川原市民のみならず、多くの歴史研究者、歴史「愛好者」が待ち望んでいた「五所川原市史通史編2」が平成十年三月に刊行された。本書の執筆・編集に尽力した同史編集委員会近・現代部会のメンバーは合計九名からなり、これらの人々は弘前大学に在職したり、あるいは学んだ経験のある研究者を中心として構成されており、本書の執筆・編集には最も適した人選であったといえる。これほど多くの人々で通史を執筆する場合、記述などに不整合を伴うことが多いが、幸いのことにもそうした弊害もそれほど目立つものではない。

さて、本書を含め、自治体史が編集される意義は一体どこにあるのだろうか。

周知の様に自治体史が編集される動機はいくつか存在するが、かつて全国的に最も多くの自治体史が編集されたのは「明治百年」の時期であった様に、国、あるいは当該自治体などにとって何らかの「記念」や「節目」となる時期に編さんされるのが一般的であろう。何をもって

「記念日」「節目」とするのか、何がその理由となりうるかなどについて、いささかの議論も存在するが、いずれにしろ、「記念日」「節目」にあたって、当該地域の歴史を編集することの意味は、何よりもその「時点」で、過去の事実、歩み、展開などを歴史として検討することで当該地域の今日性を再検討し、再認識していくことにあるであろう。そして、そのことを通じて、人々が地域の在り方をより深く認識し、地域アイデンティティを獲得していくことを可能とすることにある。こうした点は、特に近現代史という、地域の人々にとって最も身近な過去である時代の編集においては一層の重要性をもっていると言わなければならない。歴史として検討される近現代の歴史的展開の「延長線」上に存在しているからである。いかなるものであれ、通史、特に近現代史の執筆・編集はこうした点を逃れては存在しないことは明らかであろう。

この様な意味を多分に有する市町村自治体史などの編集においては、都道府県や国という「上位」に位置するものの歴史的展開と市町村の歴史的展開との有機的関連をどの様に捉えるか、あるいは逆に市町村史の独自性をいかに発掘していくかが、同時に行われなければならないことも周知のことである。この点を意識的に追及することがなければ、市町村史は都道府県史や日本史の通説に埋没してしまうか、あるいは逆に、単なる独善的「お国自慢」に終始する結果となることもこれまでしばしばみられたことである。

二

「五所川原市史通史編2」は、「五所川原市史通史編1」を受け、明治四年（一八七二）の廃藩置県以後から現代に至るまでの五所川原市の近現代の通史部分（第六編、第七編）と五所川原市の民俗（第八編）、その他（統計など）からなるが、各編の章立ては次ぎのようになっている。

第六編 近代の五所川原

第一章 明治前期の五所川原

第二章 明治後期の五所川原

第三章 大正期の五所川原

第四章 恐慌と戦争の時代

第七編 現代の五所川原

第一章 戦後変革期の五所川原

第二章 市制施行後の五所川原

第三章 五所川原の現在と未来

第八編 五所川原の民俗

第一章 人々の生活

第二章 内水面漁業

第三章 人々の儀礼と信仰

第四章 くらしの中の芸能など

なお、この通史とともに資料編も編集されており、通史の執筆に当たって依拠されている資料の多くはこの資料編に収録されている。

さて、本書の近現代の時期区分及び章立てはこの種の自治体史に多くみられる通説に従ったものであるが、第七編第三章の最終節、すなわち本通史の最終節である第三節は「五所川原市の未来を語る座談会」として、五所川原市の人々による、過去（生活、経験、生涯など）と将来への期待などが収録されており、内容と構成はともかく、新しい企画である。また、各章はおおよそ四ないしは五節から構成されており、政治・行政、産業・経済、文化・教育などで構成され、しかも、多くの場合、限られた紙面のなかで要領よくまとめられている。

以下、各章毎にその内容を簡単に紹介しつつ、必要に応じて評者のコメント、意見などを述べていきたい。

第六編第一章は第一節「明治維新期の政治と行政」第二節「明治維新期の諸政策」第三節「明治初年の教育と文化」第四節「文明開化と五所川原」の四節からなり、明治四年から明治三十二年「市町村制施行」頃までを扱っている。この時期は明治政府の中央集権と地方行政制度の改変、地租改正に代表される国家財政の確立、文化の「近代化」が模索された時期であり、したがって、こうした諸政策が地域に具体的に何をもたらした、変化させ（あるいは変化しない）、あるいは問題を引き起こしたのかなどが検討されなければならないだろう。本書も基本的にはかかる視点から叙述されている。

第一節は地方行政組織の変遷と確立課程を取り扱うもので、すでに定説化している分野であるが、そんな中で、県政や郡政と五所川原の政治

状況との関連を五所川原側の資料から逆照射したり、あるいは当時の村政の「次元」を生そのまま示すことで興味と関心を持てるものとしている。第二節もはや定説化した分野ではあるが、今回新たに発掘された『寺田家日記』などの資料によって、民衆が「御一新」や「新政」をどうみていたのかなどが明らかにされるなど関心が引かれる記述も多い。第三節は資料的限界もあり、五所川原の事実がほとんど記述されていないのは残念であるが、紹介されている阿部家蔵書や三上家蔵書の目録から当時の五所川原の知識水準の一端がしのべよう。第四節では新資料の発掘とその分析により、当地における自由民権運動やこれに係する政治的事件などが記述されている。「大上段」には振りかざしてはいないものの、この時期のわが国、青森県の政治状況を的確に認識した上で記述であり、五所川原の政治状況をそこからも浮かび上がらせている。

第二章は第一節「明治後期の政治と行政」第二節「日清・日露戦争と五所川原」第三節「交通・運輸と商工業」第四節「農林業の発展」第五節「明治後期の教育と文化」からなり、時期的には明治二二年以降における明治年間が扱われている。この時期におけるわが国は国会開設や「産業革命」の進行など、「近代」日本が形成・確立する時期であり、各地において政治運動が本格化し、農業地帯においては地主制の本格的な展開がみられた時期である。

第一節では特に二つの点に関心が持たれる。一つは『七和村議会資料』を使用して「町村制」施行直後の村政を具体的に示した点であり、もう一つは当時の政治運動、政党運動の展開をダイナミックにまとめた

点である。ただ、当時の地主制の展開と政治的関心などについては必ずしも説得的な記述とはなっていない。第二節は日清・日露戦争が五所川原の民衆にどんな影響を与えたのかがよくわかる記述となっている。「ないものねだり」をするならば、「日清・日露戦後経営」の中で民衆生活はどう変化させられたのかなどの叙述も欲しいところである。第三節は西北五地方の商業、経済の中心地としての五所川原が形成される時期の問題を扱う部分であり、紙面的にはもう少し多くてもよかったと思われる。分量配分の少なさが問題の追及を中途半端に終わらせている。第四節は地主制の確立を中心とした部分あり、具体的な資料によりその過程がよく示されているといえよう。ただ、当地の巨大地主は商業・金融業・製造業などを営み、また政治家としても活動した人物が多いことはよく知られており、この点についても具体的な分析が可能であったかどうか、知りたいところである。また、評者は本県における地主制の確立を明治四〇年代とみているが、こうした点まで踏み込んだ説明は不自然であろうか。第五節では「明治後期の民衆生活」の項が、衛生、出稼ぎなどの諸問題を総括的に扱っており、関心を持って通読できる。

第三章は第一節「五所川原の発展と政情」第二節「鉄道の開通と五所川原」第三節「大正期、五所川原の農林業」第四節「大正期の教育と文化」からなる。わが国は資本主義的生産構造が確立するとともに、日清・日露戦争に勝利することで対外進出を加速化させていたが、政治的には「大正デモクラシー」に代表される民衆的政治参加、政党政治も発展しており、文化的にも新しい思潮の誕生もみられた時代である。もともと本県は大正二二年に史上稀な大凶作に見舞われるなど、農業県としての

限界も余儀なくされていたであろう。

第一節では当時の五所川原と北津軽郡の政情が記述されるとともに、この地における「社会主義思想」の流布についても目配りしている。第二節では「陸奥鉄道」建設問題や米商人にスポットを当てながら当時の経済的發展を記述している。第三節の中心は大正二年大凶作であるが、この凶作を境に農業生産構造が変化していく状況や林業等についても手際良くまとめられている。但し、第一節においても凶作対策に若干ではあるが触れており、本節と重複する形となっているのは問題である。第四節では当時の新しい思潮、文化の五所川原における流布と、教育、スポーツが記述されているが、資料的限界もあり、突っ込んだものとはなっていない。

第四章は第一節「恐慌下の五所川原地方」第二節「戦時下の五所川原」からなり、昭和前期の通史である。恐慌と対外侵略の拡大の中で開始され、戦争の拡大とともに国民生活のあらゆる分野における統制が強化され、やがて敗戦を迎える時期である。本章（あるいはこれ以降の章においても）は資料集に収録しきれなかった資料がかなりの程度引用されつつ記述されているが、このことが本章を読みづらいものとしているが止むを得まい。また他の章と比べて分量も少ないが、そうした中ではこの時期の五所川原の在り様が多方面にわたってほぼ漏れなく記述されているといえよう。特に両節にみられる農業および農業問題の取り扱い扱いはコンパクトにまとめられている。

第七編は戦後から現在に至るまでの五所川原の展開について扱う、いわば現代編である。本編第一章は戦後の復興と変革の時期（昭和二〇年

から二九年頃まで）、第二章は混乱の中から安定と発展を確実なものとし、高度成長期を経て現在の五所川原に至るまでを扱っている。この時期には昭和二九年の市制施行という画期が存在する。第三章では五所川原の現況と将来への展望が記述されている。

第一章は第一節「変革期の人々のくらし」第二節「戦後改革と五所川原」第三節「復興期の五所川原」からなる。本章では敗戦による混乱と解放、民主主義の進展のなかで市民が新制五所川原を創造していく過程が記述されているが、第六編に比べると民衆生活が仲々伝わってこない様に思われるのは私一人ではあるまい。その理由の一つは本章の分量が極めて少なく、この当時の重要な出来事であり、戦後民主主義の出发点であった農地改革などが十分に展開されていないことにある。ほとんど唯一、津軽鉄道争議のみが辛うじて戦後民主主義を感じさせてくれていると言える。

第二章は第一節「市政の展開」第二節「市制施行の背景」第三節「五所川原における地域経済の変化」第四節「市制施行の帰結」第五節「教育と文化」からなる。節構成から判明するように、政治的問題としては五所川原の市政施行が中心として取り上げられ、また経済・産業については、高度成長下における地域経済とその矛盾が取り上げられ、さらにこの点は教育・文化の変容としても取り上げられている。本章は通史の実質的終章であり、明治、大正、昭和を通じた五所川原の歴史的展開の総まとめでもある。そうした点からして、行政、政治の問題は市制施行を中心として記述されるのは当然であろう。市制施行は西北五地域を中心都市として五所川原が発展してきた帰結であり、将来への土台である

からである。しかし、難を言えば、第四節「市制施行の帰結」などはいささか不必要に長過ぎる。産業・経済は高度成長と地域産業の問題として順当に取り上げられている。そこでは労働争議なども積極的に取り上げられており、高度成長と地域経済の緊張した関係が垣間見られる。ところ、出稼ぎ問題が地域経済の問題としては部分的にしか取り上げられず、いわば社会問題として扱われているのはいささか疑問として残る。出稼ぎは優れて高度成長のなせる技であるからである。また、労働（力）問題として仮子問題が取り上げたことは賛成であるが、そうならば、民俗編で展開されている労働慣行なども、歴史的課題として通史の中のどこかで検討すべきではなかっただろうか。

第三章は第一節「五所川原の現況」第二節「五所川原の未来」第三節「五所川原市の未来を語る座談会」からなる。第一節は工業、商業、農林業の現況、第二節では二一世紀を目指す五所川原の長期計画が紹介され、官公庁と団体が説明されている。第三節は前述の通り、座談会を収録した本書の新しい試みであり、自治体史のオーソドックスな終わり方に若干の変化を持たせている。いくつかの自治体史の執筆を手がける中で、評者自身が反省していることであるが、例えば、長期計画などについて記述する場合、単なる紹介でよいのか、あるいは客観的な検討を一定程度加えるべきなのか、という課題があるが、本書では前者のスタイルとなっている。

第八編は民俗編であるが、いずれも綿密な調査に基づくもので興味を引かれるものとなっている。従来、あまり取り上げられてこなかった内水面漁業も実態もここでは丹念に検討されている。

三

以上、評者の感想を交えつつ内容を簡単に紹介してきたが、全体的な感想として、本書は極めてコンパクトに配分良くまとめられていると思われる。また一部を除き、難解な専門用語での記載もなく、五所川原の歴史的展開を多方面から検討したものとなっている。したがって、九〇〇ページを超す大書であるものの、それほど苦勞なく通読出来るものとなっていると言えよう。

また、基本的には五所川原における事実を検討、紹介し、再編成することで通史を記述する「禁欲的」姿勢を貫いており、資料に多く語らせている。あるいは、新資料の発掘とそれに基づく新しい歴史像の積極的な展開もしばしばみられるところである。教育、文化などの一部において資料的限界もあり、通史の枠内に埋没した部分もあるが止むを得まい。したがって、本書を通読することで、五所川原市の「今日性」を歴史的展開の中から照射することを手助けするものとなっているといえよう。本書がそうした積極的な面を多分に持つものであることを認めた上で、若干「ないものねだり」をするならば、以下のような点が挙げられる。

まず第一に、執筆に当たっては、政治的分野と産業・経済分野の有機的連携があつて良かったのではないかと思われることである。例えば、地主制の発展と「名望家」政治とは一体的なものであり、どの様に関連しつつ歴史的展開をみせるのか、ダイナミックな記述があるべきではな

かっただろうか。また、第二に、五所川原の事実にこだわる「禁欲的」姿勢がわざわざ（？）し、五所川原の歴史的展開を青森県やわが国の歴史的展開といかなる有機的関連をもっているのかはつきりしない点も伺われるのではなかろうか。さらに、歴史的に極めて重要な事実は分量に囚われずにもう少し余分なスペースで記述できたらよかったと思う点が多分にあつたのは前述の通りである。

しかし、何はともあれ、五所川原の歴史的事実を可能な限り追及することと完成されたのが本書であり、今後の自治体史編纂事業の発展に大きな寄与をなすものと言えよう。

（すえなが・よういち 青森大学経営学部教授）